

中村直三旧蔵の安本亀八による肖像彫刻について

塩
澤
寛
樹

中村直三旧蔵の安本亀八による肖像彫刻について

塩 澤 寛 樹

はじめに

中村直三は、文政二年（一八一九）に大和国山辺郡永原村（現奈良県天理市）に生まれ、幕末から明治において稲種の改良、植桑養蚕、綿種の改良など、農耕、営農の研究や指導にあたった農業指導者として知られ、いわゆる「老農」の中でも特に代表的な「明治の三老農」の一人に数えられている。直三についての研究はすでにいくつもの成果が知られるが、その最も早いものであり、彼の経歴や人物像、業績、逸話等が詳しくまとめられている荒川清澄『老農中村直三』（一九〇九年、西行洞）によれば、直三は一時、自宅に食客として安本亀八を住まわせ、のち近くの丹波市（現天理市内）に住まいを提供したことが書かれ、直三の居宅には亀八の手になる肖像彫刻がまとまって祀られていたことも記されている。その後、これらの像の存在は富森盛一『生人形師 安本亀八』にも触れられている。しかし、諸像の彫刻史的概要についてはこれまで詳しく紹介されたことはなく、像主についても一部に混乱がみられる。

筆者は近時、この肖像彫刻が今も現存することを確認し、幸いにも精査する機会を得た。そこで、本稿はこの折の調査に基づいて、各像の概要を紹介した上で、諸像の表現上の特色や意義、制作実態や丹波市での亀八の活動などについて、順に考察することとする。

一、各像の概要と表現

（一）各像の概要

各像の彫刻史的概要は詳しく紹介されたことがないので、ここで一軀ずつ示すこととする。

中村直三夫妻像

「形状」

直三像

頭頂のやや後ろ寄りで髷（亡失）を結う。鼻孔を穿ち、耳孔は穿たない。両手は胸前で、甲を前にして指を伸ばし、左手は右手の指を挟むように包む。顔を正面に向けて、足を軽く開き、右足をわずかに前に出して立つ。服制は、薄茶に縞（金通縞）の着物を右前に着け、帯を締め、腹前に結び目をあらわす。下駄を履く。

夫人像

頭頂で髷（亡失）を結う。鼻孔を穿つ。耳の上半は髪に隠れる。両手は直三像と同様の形にあらわす。顔を正面に向け、跪坐するが、右膝をやや浮かせる。直三と同じ柄の着物を右前に着け、細い帯を締め、草履を履く。

〔法 量〕(単位…センチメートル)

直三像

像 高	三二・八 (現状)	面 長	五・五
頭頂ゝ顎	六・〇 (現状)	面 長	五・五
面 巾	三・六	耳 張	四・三
面 奥	四・九	肘 張	一二・七
袖 張	一一・〇	胸 厚	六・七
腹 厚	六・九	裾 張	九・二
足先開	七・四		
台座高	二・六	台座幅	三六・八
台座奥	二二・七		

夫人像

像 高	二〇・六 (現状)	面 長	四・六
頭頂ゝ顎	五・六 (現状)	面 長	四・六
面 巾	三・七	耳 張	三・六
面 奥	五・三	肘 張	一一・〇
袖 張	九・九	裾 張	九・二
胸 厚	六・六	腹 厚	六・九
膝 奥	一一・三		

〔品質・構造〕

直三像

木造 (針葉樹材)。寄木造。彩色。玉眼嵌入。

頭部は一材製で、面部で前後に割り矧いで玉眼を嵌入するか。筒状の首柄を造り、体部に挿し込む。体幹部は左右二材矧ぎとし、内刳りを施す。両袖部、両手首先、両足部を別材製とするか。帯の結び目、下駄を別材とする (紐の部分は足先と共木)。

夫人像

直三像に準じる。ただし、帯の結び目、下駄はあらわさない。

〔保存状態〕

直三像

頭頂の鬘を亡失し、帯の結び目が遊離する。

夫人像

鬘の一部を欠失する。

〔銘記・納入品〕

直三像の像内に紙で包まれた歯三本を納入する。

〔伝 来〕

所蔵者屋敷内に祀られる。

〔制作年代〕

江戸時代末期 (一八六五年頃)

中村善五郎・サカ夫妻 (直三父母) 像

〔形 状〕

善五郎像

後頭部で鬘を結う。頭髮は側頭部より後方で黒彩する。鼻孔を穿ち、耳孔は穿たない。両手は脚上に置き、右手は甲を上にして指を伸ばす (左手は亡失)。顔を正面に向けて、膝を軽く開き、正座する。服制は、青色の小袖の上に黒の紋付き羽織を着ける。

夫人像

後頭部で鬘を結い、もとは笄を挿すか。鼻孔を穿ち、耳孔は穿たない。両手は脚上に置き、左手は力を抜いて仰ぐ。顔を正面に向けて、正座する。服制は、薄い色の襦袢に青色の小袖、焦茶の紋付き羽織を着け、茶色の前帯を締める。

〔法 量〕(単位…センチメートル)

善五郎像

像 高	一六・〇	面 長	四・三
頭頂ゝ顎	五・一	面 長	四・三
面 巾	三・四	耳 張	三・九

面 奥 四・六
袖 張 一五・四
腹 厚 七・〇
膝 奥 一一・三
像 高 一五・二
頭頂 顎 四・六
面 巾 三・一
面 奥 四・六
袖 張 一二・二
胸 厚 六・七
膝 張 七・五
像 奥 一三・五

肘 張 一一・六
胸 厚 六・三
膝 張 八・八
像 奥 一三・九

夫人像

善五郎像

木造（頭部は針葉樹材、体部は桐材か）。寄木造。彩色。彫眼。

頭部は一材製で、内削りを施さない。筒状の首柄を造り、体部に挿し込む。体部も一材製で、底面より内削りを施し、底板を嵌める。両手首先を別材とし、袖口に挿し込む。脚部は別材矧ぎとする。

夫人像

木造（頭部は針葉樹材、体部は桐材か）。寄木造。彩色。彫眼。

構造は善五郎像に準じる。ただし、底板は像底に貼り、裾部は底板材より彫出する。

〔保存状態〕

善五郎像

左手首先・羽織の紐を亡失する。

夫人像

右手首先を亡失する。

〔銘記・納入品〕

認められない。

〔伝来〕

所蔵者屋敷内に祀られる。

〔制作年代〕

江戸時代末期（一八六五年頃）

中村善助・トメ夫妻（直三祖父母）像

〔形状〕

善助像

善五郎像に準ずる。ただし、小袖は濃い茶色、羽織は茶色とする。

夫人像

善五郎夫人像に準ずる。ただし、小袖は緑、羽織は赤茶、帯は青色とする。

〔法量〕（単位：センチメートル）

善助像

像 高 一五・七

頭頂 顎 四・七

面 巾 三・五

面 奥 五・〇

袖 張 一四・七

胸 厚 七・一

膝 張 九・八

像 奥 一四・三

夫人像

像 高 一六・二

頭頂 顎 四・六

面 巾 三・八

面 奥 四・九

面 長 四・〇

耳 張 三・九

肘 張 一一・七

裾 張 一六・一

腹 厚 七・八

膝 奥 一三・〇

像 奥 一四・三

面 長 三・四

耳 張 四・二

肘 張 一一・五

袖	張	一四・一	裾	張	一五・四
胸	厚	七・四	腹	厚	七・二
膝	張	九・二	膝	奥	一四・〇
像	奥	一四・九			

〔品質・構造〕

善助像

善五郎像に準ずる。

夫人像

善五郎夫人像に準ずる。

〔保存状態〕

善助像

羽織の紐の右側一部が欠失する。

夫人像

良好。

〔銘記・納入品〕

認められない。

〔伝 来〕

所蔵者屋敷内に祀られる。

〔制作年代〕

江戸時代末期（一八六五年頃）

中村直三坐像

〔形 状〕

左手は腹前で掌を仰ぎ、右手はその上に載せて握り、笏を執ったか。顔を正面に向けて、正座する。烏帽子を被り、単衣を着ける。現状、袴はあらわされない。

〔法 量〕（単位：センチメートル）

像	高	二六・二	像	高	二一・七（烏帽子を除く）
頭頂～顎	七・五		面	幅	四・六

耳	張	五・八	面	奥	六・二
肘	張	一七・九	袖	張	二四・九
裾	張	一八・四	胸	厚	八・八
腹	厚	八・九	膝	奥	一七・五

〔品質・構造〕

木造（広葉樹材）。寄木造。頭髮と眼球を除き、素地仕上げ。彫眼。

頭部は一材より彫出し、筒状の首柄を設けて体部に挿し込む。内刳りは施さない。体部は袖先までを含めて一材より彫出し、内刳りを施す。脚部は一材製で、内刳りは施さない。烏帽子を別材製とし、後頭部で木釘などで固定していたとみられる（現状釘は亡失）。

〔保存状態〕

笏、烏帽子を留める釘を亡失し、烏帽子の基部の一部と右眼付近を欠失する。

〔銘記・納入品〕

認められない。

〔伝 来〕

所蔵者屋敷内に祀られる。

〔制作年代〕

江戸時代末期～明治初期（一八六七～六八年年頃）か

石田梅岩坐像

〔形 状〕

頭部で髷（亡失）を結う。頭髮は墨彩する。鼻孔を穿ち、耳孔を深くくぼめる。両手は膝上に置き、左手は甲を上にして指を伸ばし、右手は甲を前に向けて扇の基部を執る。顔を正面に向けて、膝を軽く開き、正座する。服制は、茶色の紋付き小袖の上に青色の肩衣（裏地も青）を着け、青地に白い水玉の半袴を着ける、いわゆる半袴の姿である。白い足袋を履く。左腰に刀を差す。

〔法 量〕（単位…センチメートル）

像 高	二八・二	面 長	七・二
頭頂ノ顎（現状）	八・七	耳 張	七・七
面 巾	六・四	肘 張	二〇・三
面 奥	八・七	肩 張	二三・六
袖 張	二六・三	腹 厚	一一・八
胸 厚	一一・四	膝 奥	二二・三
膝 張	二一・五		

〔品質・構造〕

木造（針葉樹材）。寄木造。彩色仕上げ。玉眼嵌入。

頭部は一材より彫出し、襟に沿って体部に挿し込む。内刳りは施さない。体部も一材より彫出し、内刳りは施さない。脚部を別材矧ぎ付けとする。両手首先を別材製とし、袖口に挿し込む。扇と刀は別材製とする。像底は白く彩色する。

〔保存状態〕

鬘、刀の鞘先、小柄を亡失し、頭部に汚れが付く。彩色は一部で剥落する。

〔銘記・納入品〕

認められない。

〔伝 来〕

所蔵者屋敷内に祀られる。

〔制作年代〕

江戸時代末期～明治初期（一八六五～七五年頃）か。

〔備考〕

石田梅岩は貞享二年（一六八五）に丹波国に生まれた心学の思想家で、多くの門弟を育て、延享元年（一七四四）に没した。本像は石田梅岩の肖像と伝わるが、その明徴はない。梅岩の没年と直三の生年から、両者に生前の接点がないことは明らかであるが、直三は若年の一時、心学を学んだといひ（荒川一九〇九）、本像が梅岩の像であるとする、本像の存在はそれに因むものか。なお、富森盛一『生人形師 安本亀八』

では、本像を直三の肖像とするが、心学明誠舎などに残る梅岩の肖像画との類似や直三の写真との比較から、本稿では梅岩像として扱う。

二、諸像の特色と表現

前章をふまえて、諸像の特色をまとめておく。

表現上から見ると、面部に実在感、生々しさがあらわされている点
は他の亀八作例と共通している。表情はもちろんであるが、頬・額の
皺や唇の縦皺といった細部の克明さも類似している。また、諸像が中
世以来の仏像彫刻の技法的伝統を受け継いで造られている点も同様で
ある。具体的には、頭部と体部を別材により造り、首柄を設けて体部
に挿し込む点、体部に内刳りを施す点、面部を割り矧いで玉眼を嵌入
する点、手首先や脚部を別材で造って矧ぎ寄せる点などである。一言
で言えば、寄木造によるということになる。寄木造は細部において
様々な違いはあるが、仏教彫刻においては平安時代後期以来の長い伝
統をもつ技法である。一方、明治以降、欧米の影響によって盛んとな
った洋風彫刻においては木彫であっても寄木造は用いられず、際
だった違いがある。前章で紹介した諸像の大きさからすれば、寄木造
に依らず、一材から彫出することは決して難しいことではないと思わ
れるが、寄木造が用いられている。亀八は最晩年の明治三十年代におい
ても寄木造を守っており、この時期から一貫していることが知られる。
以上のとおり、諸像には表現、構造の点から他の亀八作例と共通
し、また、次章で述べる事柄と考え併せれば、諸像を亀八による作例
と認めて疑いないものと考えられる。

次に、中村直三夫妻像のうちの直三像について補足すべきことを述べる。

まず、この像が立像であることが留意される。古代以来、日本の肖像彫刻は坐像が大半を占めてきた。明治以降、欧米の影響によって盛んとなった洋風彫刻においては立像も盛んに造られるようになった

が、仏師の家に生まれ、自らも仏師と名乗った亀八の肖像彫刻は、制作技法も含めて古来の伝統に則る部分が多い。その中で、直三像は松本順像と共に、立像の作例として希少な存在である。また、本像の像高は一尺一寸ほどであるが、坐像に換算すると概ね五寸余りとなる。善五郎夫妻像、善助夫妻像も同様である。亀八制作の肖像彫刻は坐像で一尺前後の像が多いので、これらの六軀はサイズの上からみると約半分であり、そこにも特色がある。

次に、直三像を彼の写真と比べると、年齢やひげの有無があるものの、同一人物とみて疑いない肖似性を持つている。本像がまさに厳格な意味での「肖像彫刻」であることが分かり、直三像は本来の意味における「写実性」^④を有しているといえる。直三本人との肖似性については、中村直三坐像においても同じである。この事実は、亀八の表現力が単に実在感を表現できるというだけでなく、現実存在する人間の姿を正しく写すことができる能力を持つていることを示しており、この点において重要な意義を有している。一方で、善五郎夫妻像、善助夫妻像はそれに比べて特徴が少なく、本人が親しく接していた直三像とは隔たりがあり、人物像というべきであろう。

さらに、直三像の像内に歯を納入している事実も注目される。この歯は直三自身の歯ではないかと推定されるが、直三は土葬されており（荒川一九〇九）、どのように採取されたのかは明らかでない。像内に歯や骨、髪などを納入することについては、仏教彫刻において十二世紀半ばから例がある。奥健夫氏は、『山槐記』保元三年（一一五八）八月二十一日条にみえる、中山忠親の亡き母の遺骨が高野山遍照光院の大日如来像の像内に込められたことを初例としている（奥一九九八・一九九九、同二〇一九）。像内に歯を納入する例は、鎌倉時代初期から知られている。また、仏像に舍利を納入する例は奈良時代から知られるが、盛んになるのは十二世紀後半以降といいい、像に聖性または生身性を付与することを意図していると考えられる（奥一九九八・一九九九、同二〇一九）。直三の像に本人の歯を納入するという行為は、直三の死後、像に本人

との一体性を高めることを意図して行われたとみられ、感覚としては仏像への仏舍利納入行為と近い。直三は明治七年には近在の穴師神社の祠官を務めるなど、熱心な神祇信仰の持ち主として知られ、中世以来の仏教彫刻の例に則ったのか否かは明らかでないが、注目すべき事例といえる。

三、亀八の天理市内での制作実態

（一）中村直三旧蔵肖像彫刻の制作

各像に銘記はないものの、中村直三夫妻像、直三父母像、直三祖父母像の六軀については、造像の経緯や制作年代は前記した荒川清澄『老農中村直三』により、かなり明らかとなる。この中に、直三旧蔵の肖像彫刻について、以下のような記述がある。少し長いが、造像事情を知る上の唯一といえる資料なので、引用する。

「翁の嗣子●●の家に今も祀られ居る木像六体あり 之は安本亀八と云ふ彫刻師の刻みたるものにして、安本亀八は元来熊本の人なるが放浪して翁を永原村に訪ね来るや、未だ一回も逢ふた事も無き他人なるにも拘らず、亀八に同情して暫らく寄食せしめ其後丹波市に居を與へて相当に暮さしめたり、亀八之を大に感激し翁の爲めには如何なる事も辞せずと云ふ程なりしが何時の間にや翁夫婦の水垢離を取り神を拝する時の立姿を彫刻して翁に贈りたるに、翁は亀八に対して、卿の技術は当初より大に愛する処なり願くば予が父及祖父夫婦の木像をも刻み呉れずやと特に亀八に依頼したるものが翁夫婦の外の父善五郎及祖父善助の二夫婦の木像にして翁は毎朝之を礼拝して生ける人に対するが如く孝養の誠を致し居りたる由なり（以下略）」（●は筆者により伏せ字とし、旧字は新字に改めた）

ここに記される六軀が現存の像であることは疑いない。年次は記されないが、次節に示すとおり、亀八が旧永原村の直三のもとで食客と

なり、その後、近くの丹波市に住まいを与えられたのは慶応元年（一八六五）頃かと考えられるので、六軀の制作もそれからさほど時を経ない頃かと思われる。おおよそ慶応元年から同二年頃かと考えられる。また、烏帽子を被る直三像について、やはり『老農中村直三』には、次のように書かれる。

「●●の家に別に翁の像一体あり、同じく亀八の刻みたるものにて、厨子に入れたる坐像なり、之は翁が伏見の役に出征せんとしたる折り●●等其他の家人を集めて、予出征して死する事ありとも毫も痛み悲しむべからず、此像を予と思へよと諭したるが此像なりと、曩きの立像よりは余程後の作なり」

この像についても記述を信じれば、「伏見の役」、すなわち一八六八年一月の鳥羽・伏見の戦いに際しての造像であると考えられ、その直前の制作であろうか。

（二）永原・丹波市滞在中の制作活動

『大宇陀町史』（一九五九年、大宇陀町史刊行会）所収「仏像」の「余論」（執筆米山徳馬）によると、宇陀市迫間の山岡武雄氏宅には、「光政」の刻銘のある鹿が所蔵され、箱蓋表には「肥後住安本光政（花押）」、裏には「明治元辰年十二月八日求」とあり、その送り状には次のように書かれているという。

「肥後国住人安本亀八光政ハ八ヶ年巳然伊州名張二暫く候間、住居、其後萩原駅に罷越、五ヶ年巳然に松山上町に住居、二ヶ年余り生人形所々より注文を請取、細工職而巳を、渡世に致し居、三ヶ年巳然より丹波市駅に罷越、同所より、この鹿を仕立送り申候」これを信じれば、おおよそ亀八の足跡は次のとおりとなる。

万延元年（一八六〇） 名張へ
文久二年（一八六二）頃 萩原駅（現宇陀市）
文久三年（一八六三） 松山上町（現宇陀市）
慶応元年（一八六五） 永原へ、その後丹波市（共に現天理市）

一八六〇年代における亀八の足跡を知る上で非常に重要な文書であるが、山岡家に蔵されていたという鹿や文書は現在確認することができない。しかし、町史編纂に当たって調査が行われ、それに基づいての記述であるので、内容の信頼性は高いとみられる。

丹波市での滞在がいつまでかは明らかではないが、亀八は明治八年（一八七五）八月には上海に、帰国後は上京して浅草に住むこととなるので、長くとも上海渡航前までとなる。

すると、永原・丹波市に滞在した期間に制作した、またはその可能性のある事績は、右記の「鹿」を含めて以下のものが挙げられる。

・明治元年（一八六八）の宇陀市山岡家旧蔵「鹿」（所在不明）
・宇陀市芳野水分神社殿彫刻―典拠不明ながら明治二年（一八六九）制作と伝わる（『奈良縣宇陀郡史料』、『菟田野町史』）
・個人蔵谷三山坐像―典拠不明ながら、明治五（一八七二）または

六年の作とされ（『富盛一九七六』一説に丹波市時代の作ともされる。亀八の生人形興行は管見の限り、明治三年（一八七〇）以降は大阪を中心にほぼ毎年行われている。この頃に大阪に戻ったとも考えられるが、丹波市滞在がいつまでであったかについては、なお検討課題としたい。

まとめ

以上に述べたことを簡単にまとめておく。

中村直三旧像とされる肖像彫刻八軀は表現、文献から亀八作例と認められ、構造面では仏師の技術が用いられている。そのうち、中村直三夫妻像のうちの直三立像、直三坐像については、写真との比較から確実に肖像彫刻というべきものである。写真と比べることができる数少ない肖像彫刻作例として、非常に意義深い。それに対して、善五郎夫妻、善助夫妻はそれに比べて特徴が少なく、本人が親しく接していた直三像とは隔たりがある。人物像というべきであろう。

直三立像は、立像である点や像内に本人のものと推定される歯を納入する点が特筆され、後者については仏像への舍利納入行為と近く、像に本人との一体性を高めることを意図して行われたとみられる。

荒川清澄『老農中村直三』の記述を参照すると、直三夫妻像、善五郎夫妻像、善助夫妻像は、おおよそ慶応元年（一八六五）から同二年頃かと考えられ、直三坐像は一八六八年一月の鳥羽・伏見の戦いに際しての造像とみられ、その直前の制作と思われる。

そして、一八六〇から七〇年代年代における亀八の伊賀・大和滞在中で、現天理地域の永原・丹波市での期間は比較長、数年ほどに及んだようである。この場所から他所への注文を受けて制作をしていたことが知られる。

以上のように、伝来とおおよその制作年代が明らかな亀八作例がまとまって残されている意義は大きい。諸像は亀八の制作活動全体を考える上でも貴重な存在である。また、自宅に自分や先祖の肖像彫刻を祀り、時には像内に歯を納入することも行われるなどの事例は、この時期の肖像彫刻と社会との関係を考察する上でも見逃せず、重要な作例群といえよう。

【付記】

本稿を成すに当たり、ご所蔵の方々には調査、撮影に格別のご高配を賜りました。記して深謝申し上げます。

本稿に掲載した写真は、寺島典人氏の撮影によるものです。また、谷山正道氏からは度々にわたり、懇切なご教示を賜りました。併せて御礼申し上げます。

なお、本稿は科学研究費助成事業による基盤研究（C）「中世・近世の肖像彫刻に関する総合的研究」（課題番号18K00165）の成果の一部である。

参照・引用文献

荒川清澄『老農中村直三』（一九〇九年、西行洞）
奥健夫「像内納入品」（上）（下）（『国宝・重要文化財大全』三・四、一九九八・一九九九、毎日新聞社）

奥健夫「像内納入品小史」（『仏像彫像の制作と受容——平安時代を中心——』、二〇一九、中央公論美術出版）

塩澤寛樹・竹原明理「熊本市・本藏院における安本亀八の事績について」（『群馬県立女子大学紀要』四四、二〇二三年）

谷山正道「近世後期の永原村と中村家——中村直三関係史料の紹介（一）」（『Regional』四、二〇〇六年）

谷山正道「農業リーダー 中村直三の足跡」（奈良県立大学ユーラシア研究センター編『大和の国のリーダーたち』、二〇二三年）

富森盛一「生人形師 安本亀八」（一九七六年、名張青年会議所）

『奈良県宇陀郡史料』（一九一七年、奈良県宇陀郡役所）

『菟田野町史』（一九六八年、菟田野町）

註

（1）直三の経歴・業績についてはすでに詳しい研究があり、詳細は先学に譲ることとする（荒川一九〇九、谷山二〇〇六・二〇二三）。

（2）調査は、二〇二二年九月二十九日に寺島典人（大津市歴史博物館）、竹原明理（熊本博物館）の両氏と行った。

（3）明治三十年（一八九七）作熊本・本藏院弘法大師坐像（塩澤・竹原二〇二三）、明治三十二年作奈良・小房観音寺飯田喜八郎坐像、同年作個人蔵某氏坐像二軀などの作例も寄木造で造られている。

（4）「写実」や「写実性」という言葉の意味が極めて曖昧なままに用いられていることについては以下で詳しく述べたことがある。

塩澤寛樹「肖像彫刻における写実性——唐招提寺鑑真和上像研究史から考える——」（『慶應義塾大学日吉紀要 人文科学』三三号、二〇一八年）

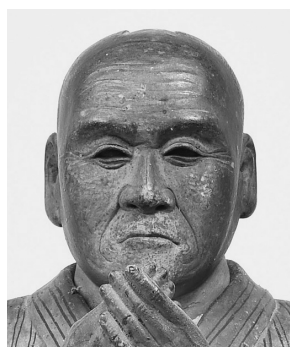
塩澤寛樹「大仏師運慶——工房と発願主として「写実」とは」（『選書メチエ七三二、二〇二〇年、講談社』）

（5）『滝山寺縁起』により、正治三年（一一二一）に源頼朝の追善として造られた像とみられる愛知・瀧山寺観音菩薩立像には頼朝の骨が納められたことが知られ、現物は失われているが、それを固定した痕跡がX線写真により明らかである。また、正治元年（一一一九）の作と推定されている足利市の光得寺大日如来坐像にも前歯の納入が確認されている。

中村直三夫妻像



像内納入の歯



中村直三の写真



中村善五郎夫妻像



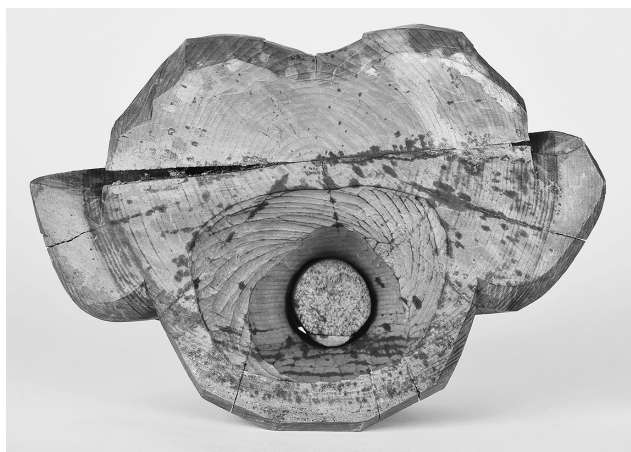
像底

中村善助夫妻像

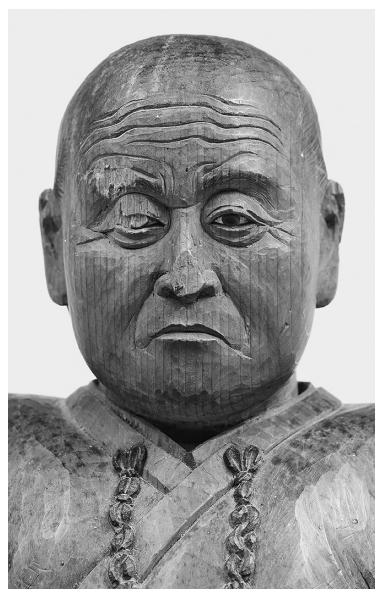


像底

中村直三坐像

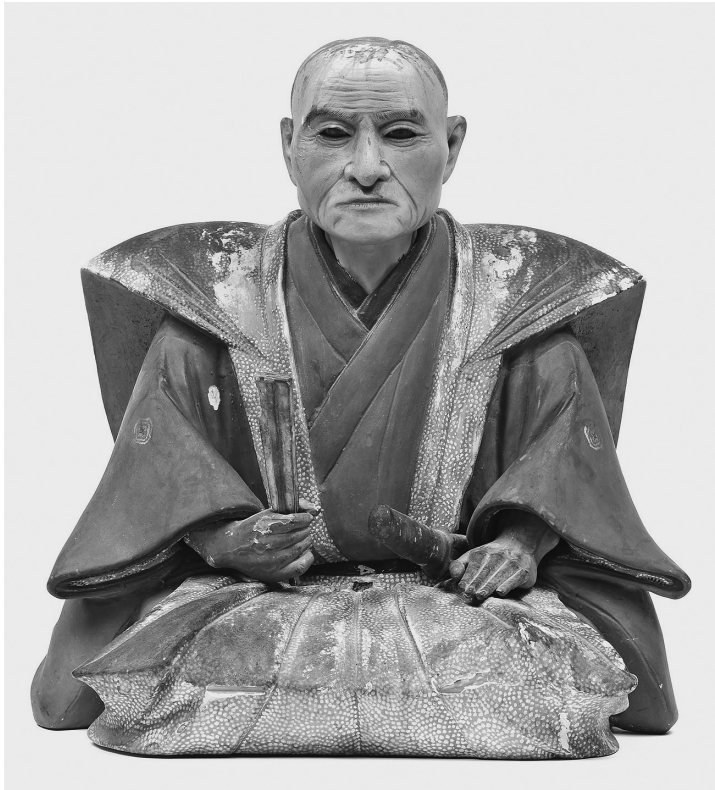


像底



烏帽子部を外す

石田梅岩坐像



頭部を外す



像底